



例年よりも温かい冬が過ぎ去り、子どもたちの旅立ちの季節となりました。今年度支援した中学三年生は 4 人。かつて支援した生徒も合わせると、総勢 15 人もの中 3 生が学び舎を巣立ちます。日本語というハンディを背負っての高校入試は、私たちの想像以上に厳しいものだったことと思います。でも、ここで歯を食いしばって頑張った生徒たちは、将来きっと日本と外国との懸け橋となることでしょう。今後の彼らの活躍を祈っています。

新年度「日本語を母語としない児童生徒支援事業説明会」と 支援開始までの今後のスケジュール

松本市教育委員会は、「平成 31 年度・日本語を母語としない児童生徒支援事業説明会」を 4 月 16 日（火）午後 4 時より、松本市教育文化センターで開催します。

日本語指導の対象となる児童生徒への日本語支援の内容や支援までの流れ、必要書類の記入法など詳しく説明します。現在、松本市子ども日本語教育センターによる日本語支援を利用している学校だけでなく、市内すべての小中学校を対象としています。

外国由来の子どもたちは、いつ、何人、突然転入するかわかりません。30 年度支援した 50 人のうち 16 人が年度途中での支援スタートでした。彼らの転入に慌てずスムーズに学校に迎え入れられるよう、説明会への参加をぜひお願いいたします。

以下、新年度の支援開始までのスケジュールです。

4 月 12 日（金） 前年度より支援継続児童生徒の支援依頼書提出〆切
（～GW 前 各学校で支援会議）

16 日（火） 「日本語を母語としない児童生徒支援事業説明会」
午後 4 時～ 教育文化センター

23 日（火） 新規児童生徒の支援依頼書提出〆切
（GW 明けごろまで、各学校で支援会議）

5 月 13 日（月） ごろから 新規児童生徒の支援スタート

😊 やさしい日本語を使ってみよう 😊

前号「やさしい日本語」の答え合わせです。もちろん答えはこれだけではありません。

問題）（子どもに指示を出すとき）

「今から漢字のテストをするので、机の上は鉛筆と消しゴムだけにして、隣の人としゃべるのをやめて、黒板に書かれた注意をよく読みながら、試験開始までしばらく待つように。」

解答例⇒今から漢字のテストをします。机の上に鉛筆と消しゴムだけおいてください。隣の人と

話さないでください。黒板の文をよく読んでください。そしてテストまで少し待ってください。

未就学児を対象にした「プレ日本語教室」を終えて

外国由来の子どもたちがスムーズに小学校生活のスタートが切れるように、今年度初めて並柳保育園の一室をお借りして「プレ日本語教室」を開催しました。1月中旬から週1回計8回、市内の保育園に通う外国由来の年長児2人が参加し、ひらがなに親しんだり、数字や色、位置や場所を表す言葉など学校生活に必要な言葉を学びました。

教室開始を前に、私たちは「子どもは椅子に座ってられるか」「途中で泣いたりしないか」など不安がありました。1回約50分の教室では、子どもたちは大きな声で日本語を話し、一生懸命運筆練習にも取り組みました。一度、保護者の方も参観されたお子さんの家庭では、その後、おうちでも親子で日本語の勉強を始めたと聞いています。



学校に持って行って
いい? だめ?

なぜ、就学前が大切か・・・。

日本の保育園、幼稚園に通っている外国由来の子どもたちは市内にもたくさんいますが、近年、彼らが小学校に入学後、文字習得に困難をきたしたり、先生の指示が聞き取れなくて自分で行動できないという声を学校から聞くことがたびたびありました。子ども自身も、保育園や幼稚園では、周りの友達の様子を見て真似をしていればその場をしのげたのに、入学後は言葉を自分でキャッチし、自分で考えて行動しないとついていけない、そんな困難さを感じている様子が伺えました。そのような現状を受け、今年度は試験的にプレ日本語教室を実施することになりました。



わかっているようで、実は・・・

今回、身の回りのもの、学校で使うものの名前を確認し、学校に持って行っていいか一緒に考えました。その中ですぐには子どもたちが言えなかったものもありました。例えば「ティッシュ」「赤白ぼうし」。「ティッシュ」はどんな時に使うかは知っていますが、言葉としてはわかりませんでした。「赤白ぼうし」はぼうしなのはわかりますが「赤白ぼう」と言われても何のことかわかりません。学校で赤白の帽子をかぶるのは日本に独特の文化だからです。

また、「前」「後ろ」「右」「左」「上」「下」「中」といった位置を表す言葉も、難しいです。一緒に手や足を動かしたり、向きを変えたりしながら言葉と方向を確認しました。これがわからないと、「前を向いてください」「後ろを見てはいけません」といった指示はわかりません。

言葉は育つもの?

こうしたことは、日本の就学前の子どもにも見られることもあるでしょう。しかし、日本の子どもはいずれわかるようになる、言えるようになると思われます。それは、家でも学校でも耳にする機会が多くあるからです。では、外国由来の子どもたちはどうでしょうか。耳にする機会は日本の子どもたちと同じでしょうか。

言葉は育つものではなく、“育てるもの”。そうした認識がこれからの時代は必要ではないでしょうか。